ウェブサイト公開用

（様式 10）
（海外特別研究員事業）
平成　31 年　4 月　26　日

海外特別研究員最終報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長　殿

採用年度　平成 30 年度
受付番号　201860311
氏　　名　隅田 浄

（氏名は必ず自署すること）

海外特別研究員としての派遣期間を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記及び別紙記載の内容については相違ありません。

記

1. 用務地（派遣先国名）用務地：　オルバニー　（国名：　アメリカ合衆国　）

2. 研究課題名（和文）※研究課題名は申請時のものと違わないように記載すること。
教育開発援助における現地実務者の役割：境界連結者としての可能性と求められる変革

3. 派遣期間：平成　３０　年　４　月　１５　日　～　平成　３１　年　３　月　３１　日

4. 受入機関名及び部局名
ニューヨーク州立大学オルバニー校

5. 所期の目的の遂行状況及び成果…書式任意　**書式任意（A4 判相当 3 ページ以上、英語で記入も可）**
（研究・調査実施状況及びその成果の発表・関係学会への参加状況等）
（注）「6. 研究発表」以降については様式 10－別紙 1～4 に記入の上、併せて提出すること。

私は研究の目的は、教育開発援助の効果向上のための現地実務者の貢献の仕方を論考することで、2年間の派遣期間における研究内容として6段階（文献研究、インタビュー・データの収集、分析枠組み構築、質問票データの収集、分析と考察、論文執筆）の作業を予定していた。今般、派遣期間を1年に短縮しており（うち一時帰国と産休・育休を取得したため実質は6か月）、派遣期間中には第一段階の文献研究を遂行した。これは所期の研究内容の予定通りである。これらの成果は2本の論文にまとめ、海外論文集（Journal of African Education Review と Journal of South Africa Journal of Education）に投稿した（査読中）。

教育開発分野において援助の効果が問題となっている状況において、私の研究では、現地実務者に注目し、彼らの役割を解明することを目的とした。そして、そのための理論的枠組みとして、境界連結者（Boundary Spanner）の概念を援用することとした。派遣期間に行った文献研究では、教育援助の効果と効果向上の必要性と、効果向上のエージェントとしての境界連結者に関する既存知見の整理を行った。研究成果のまとめは以下のとおりである。

① 教育援助の効果と効果向上の必要性

先進国が開発途上国に対して行う政府開発援助（ODA）は年々減少傾向にある。教育分野への援助も同様で、その額は 2010 年をピークに減少しつつある（OECD/CRS, 2017）。開

発途上国における教育援助は多いところで政府予算の4割を占めるなど、教育開発を行う上で非常に重要なものである。その援助が減少するということは、開発途上国、特に低所得国にとっては重大なことであり、このまま減少が続くと、途上国の教育開発は停滞し、最終的なしわ寄せは、援助の最終裨益者である学生や児童にいってしまう。このような状況で、これまでと同等の教育開発の成果を継続させるために検討されているのが、援助の効果向上である。

教育援助の効果向上に関しては、さまざまな研究が行われてきた。Paul and Vandeninden (2012)や Ashford and Biswas(2010)らは、援助をする際、最終裨益者に届けられる援助金よりも、実施プロセスにかかる経費である取引費用の方が大きくなっていることを指摘し、その実態の解明と削減の方法を論じている。Wolfensohn (2003)は、一つの開発途上国において、複数の援助プロジェクトが乱立し、プロジェクトが細切れになっている状況に対して、実施プロセスを統合することで援助の効果は向上すると論じている。また、Fredriksen(2010)は、開発途上国の中でも最も援助を必要としている国に優先的に援助を行うなど、援助の配分を適切にすることで、世界全体での教育援助の効果は上がると提言を行った。これらの研究は、先進国と開発途上国という国を単位とした論議であり、マクロ経済学の視点が使われている。

一方で、私の研究ではミクロレベルの視点で検討を行う。ミクロレベルで援助に関わっている人たちとして現地実務者に注目する。現地実務者とは、援助実施のために開発途上国に設置された現地事務所で働いている人たちで、先進国出身の人と開発途上国出身の人を含む。彼らは、援助実施において、現地の人々のニーズを聞き出し、それらをプロジェクトとして形成し、実施・運営を行う人たちであり、援助に関する一連のプロセスに深く関わっている。現地実務者が援助の効果向上に貢献しているとの指摘はこれまでも何度か言及されていたが、彼らがどのように貢献しているのか、どのような能力を持っているのかに関して体系的な研究がなされていない。私の研究では、この現地実務者の役割を解明していく。そのための方法として、境界連結者の概念を援用する。境界連結者は、2つの組織の間に存在し、その2つの組織を上手く繋げる人たちのことで、ここでは先進国と開発途上国という2つを組織として捉える。

② 効果向上のエージェントとしての境界連結者

境界連結者という概念は、組織論の文献の中で発展してきたものある。境界連結者の定義は、概して、自組織と他組織等もしくは外部環境の境界(接点)に位置し、自組織と外部環境を結びつける者とされる。境界連結者の概念は、組織に属する個人を観察するものであるが、その起源は組織を単位にした Evans の組織セット論(1972)にある。Evans は組織セット論の中で、中心となる組織を焦点組織とし、その焦点組織に資源や情報を提供するインプット組織と、焦点組織から資源や情報を提供するアウトプット組織とのやり取りを論じている。この理論を基にして、組織と組織の境界に存在し、実際の資源の取引、影響力行使を行っている個人に注目したのが境界連結者という概念である(森 2016)。

境界連結者は、自組織内と外部環境において繋がっているため、外部からもしくは内部からの情報を収集したり、伝達したりすることができる。この外部および内部との繋がりが能力として認識され、連結者としてのステータスを作り上げる(Tushman and Scanlan 1981: Levina and Vaast 2005)。実務における境界連結者には、組織において正式に任命された者(例えばトップマネージャー)などの制度上の連結者と、実務上での境界連結者がいる(Levina and Vaast 2005)。前者は、組織を代表して伝達を行う役割の人で、内部から外部への一方向の情報伝達を行い、ほとんど場合決められたやり取りをこなす。一方、後者は、あらゆる情報を伝達する役割の人であり、外部の情報を得て内部に伝達・通訳し、そしてその反対も行うとい

う、二方向の情報の流れがある。私の研究では、後者の境界連結者を扱う。

境界連結者の概念は多くの分野で活用されており、その範囲は経営・マネジメント、マーケティング・販売営業、調達、人事、広報・PR、労使関係などに及ぶ。2か国間における文脈では、企業の海外事業展開という課題において活用されている。そこでは、企業がいかに効率良く海外に事業進出をすることができるかということが検討されている。

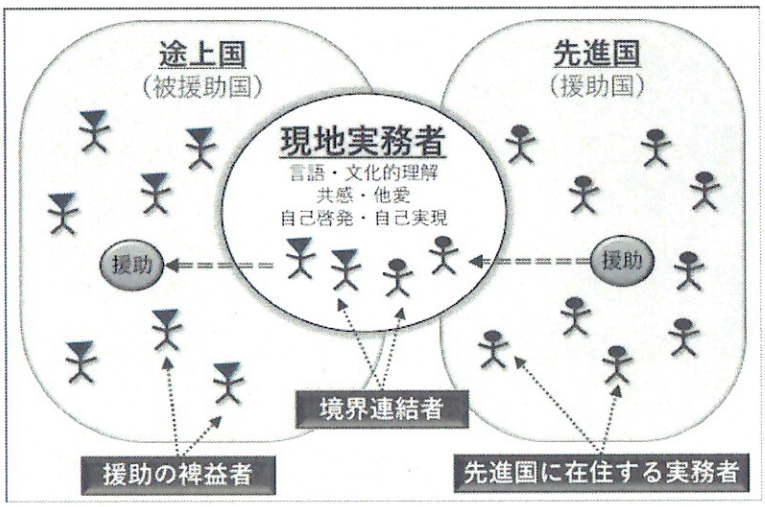
境界連結者に関する論点は主に4つに収束される。それらは、①境界連結者の行動、②境界連結者とパフォーマンスまたは役割、③境界連結者の能力である。境界連結者の行動に関する研究では、連結者が連結のためにどのような行動をとっているのかに関して研究をしている。連結者は、自組織と外部環境の間において、より良い接合をするために様々な交渉をしているが、特にその関係組織やシステムの慣習を変換に注目した研究がされている(Steadman 1992; Levina and Vaast 2005; Edelenbos and Van Meerkerk 2011)。そこでは、境界連結者は、境界の両側にいる異なる人と、異なるプロセスを繋ぎ、境界の両側に関係のある情報を選択し、そして、その選択した情報をもう一方へ伝達しているとされる(Leifer and Delbecq 1978; Tushman and Scanlan 1981; Jemison 1984)。境界連結者の行動に影響を与えるものとして、Adams(1980)は、組織属性、境界連結者と組織内メンバーの役割属性、個人的属性などの構成単位の要素と、組織間関係属性、役割間関係属性、個人間関係属性の関係の要素の両方があるとしている。つまり、境界連結者は、外部のみと上手く交渉をすればいいというのではなく、組織内においても上司や他部署などのメンバーとの調整が必要であるとしている(Frey and Adams 1972; Adams 1967; Zaheer et al. 1998)。

境界連結者とパフォーマンスの関係に関する研究では、境界連結者の存在がパフォーマンスに繋がっているかどうか、また、どのようなパフォーマンスに繋がっているかに関心を置いている。Meerkrek(2014)は、官民関係の分野で、連結者がもたらす信頼がパフォーマンスの媒介変数になるかを検討し、その結果、連結者の存在が認知されるほど、ネットワークのパフォーマンスは向上することを確認している。William(2002)は政府ネットワークの文脈で、境界連結者が関係者を繋いでいくことで、持続可能な関係を築き、維持していることを明らかにしている。その他、境界連結者がポジティブに働いた組織では、改革が起きたり(Tushman 1977)、財政的なパフォーマンスの向上があったり(Dollinger 1984)、戦略的な意思決定がされたり(Jemison 1984)、知見へのアクセスが活発になったり(Ahearne et al. 2005)することも確認されている。一方で、境界連結者が自組織のシステムや慣習を他組織に伝達しすぎるなど、連結者が働きすぎると、過剰な埋め込み(定着)が起き、組織の適応という観点でネガティブな影響があるとの指摘もある(Seabright et al. 1992; Brass et al. 2004)。また、Remalingam and Mahalingam (2011)は、複数の不明瞭な組織間における境界連結者の頻繁なやり取りは、自組織の仕事や組織に対してネガティブな態度を引き起こしてしまうことも発見している。

境界連結者の能力に関しては、境界連結者の先行条件である能力を明らかにする研究である。Tushman and Scanlan (1981)は、境界連結者は、2つの組織におけるコード体系を理解し、両方の境界において文脈化された情報に精通した者であり、その能力があることで、片方の関連情報を探し、もう片方へ伝えるという作業が可能になるとしているとしている。Willaim(2002)は、境界連結者が持つ能力のうち、特に共感性、聞き上手、他コミュニティーへの通訳などが重要な能力であると示している。さらに、境界連結者は、他の人のニーズを理解する良い聞き手であり、他の人の観点からの影響に寛容である(William 2002; Van Husles et al. 2012)ため、関係者間における共通の意義を発見することができるとされる(Levina and Vaast 2005)。本研究では、境界連結者の役割である②と先行条件である③に関して研究を行う。

教育援助において境界連結者となるのは、開発途上国に滞在する教育専門家、教育援助の担当者などである（右図参照）。彼らは、先進国と開発途上国という2つの組織に挟まれており、先進国側には、先進国内で援助に関わる専門家、実務者がおり、開発途上国側においては、途上国の政府担当官（教育省、開発省など）、学校校長などがいる。また、開発途上国側には、援助の最終的な裨益者である学生、また、その保護者らもいる。このような関係者が存在する中で、教育援助の境界連結者がどのような役割を果たしているのか、どのような能力を持っているのかを解明する。

（図）教育開発援助における現地実務者の位置



文献研究で参照した主な文献

Adams, J. S. (1976). The Structure and Dynamics of Behavior in Organizational Boundary Role, Dunnett, D. D. (ed) *Handbook of Industrial and Organizational Psychology*, Rand McNally, pp1175-1199

Evans, W.M. (1972). An Organizational-set Model of Interorganizational Relations, Tuite, M.F. et al. (ed). *Interorganizational Decision Making*, Aldine

Levina, N., and Vaast, E. (2005). The emergence of boundary spanning competence in practice: Implications for implementation and use of information systems. *MIS Quarterly*, 29(2), pp335-363.

Tushman, M. L., and Scanlan, T. J. (1981). Boundary spanning individuals: Their role in information transfer and their antecedents. *The Academy of Management Journal*, 24(2), pp289-305.

William, P. (2002). The Competent Boundary Spanner, *Public Administration*, 80(1), pp103-124